

忍御領分絵図

行田市郷土博物館所有



忍御領分絵図

徳川家康は関東に入ると、忍城代として松平家忠を派遣した後、四男の松平忠吉を城主として入城させました。その後、忍城は慶長5年（1600）から33年間の幕府直轄時代を経て寛永10年に松平信綱が3万石で城主となり、同16年に阿部忠秋が5万石で入封します。阿部家は加増を重ね、元禄7年（1694）に領地が10万石となりました。この時点の武蔵国内の領地は約7万3千94石で、相模国や上野国、摂津国にも領地がありました。同11年に「元禄地方直し」と呼ばれる大規模な村替えが行われ、武蔵国内の秩父郡を除いた領地が忍城周辺に集中・加増されるとともに、上野国・相模国の領地が収公され、武蔵国内の忍藩領がほぼ確定されたのです。

地域を一円的に押さえることとなりました。その様子を一目で分かるように描いたのが今回紹介する忍御領分絵図です。絵図の中心に忍城が描かれ、右側に利根川（北側）、左側に荒川（南側）が配されています。この2つの河川に挟まれ、網の目のように張り巡らされた河川・用水が水色で記されています。赤い線は街道、緑の線は堤防を示しています。絵図に藩領の村名が書かれており、併せて村内の寺社名も記されています。絵図の外郭に配された小判型の村は、幕領や旗本領といった藩領以外の村々です。藩領と他領の境界には安永9年（1780）に設置された境界石9基も書かれています。

本資料は松平家臣奥平家に伝来したものです。奥平家や藩主である松平家のもとで作られたとすれば、文政6年（1823）の転封後に藩領の地勢把握のために制作されたとも考えられます。いずれにせよ、その記載内容やビジュアル的な点からも、当館が所蔵する近世の絵図類の中でもひととき目を引く資料といえます。

※本資料は9月2日(日)まで、企画展示室で展示しています。

（郷土博物館 鈴木紀三雄）

特定非営利活動法人 つばき

身寄りのない人や生活困窮者など、さまざまな事情を抱える人の心のケアや、薄れがちな地域社会との交流を促し、地域福祉の向上に寄与するべく活動しているのが「特定非営利活動法人つばき」です。

同法人は平成26年に設立され、生前・死後のケアや身元の引き受け、葬祭扶助などを中心に活動しています。また、手づくりの加工食品や農産物のパズーとして、毎月最終日曜日の朝8時から朝市を開催しており、設立以来、地域との交流を深めています。朝市では、コーヒーが無料で振る舞われたり新鮮野菜が市場の半値以下で買えたりするとあって、来場者から好評を得ているそうです。

また、そこで余った食材を利用して始めたフードバンク事業は、今では地元農家と市内外の5事業者と連携するまでに発展しており、生活困窮者や福祉施設に対し、包装に印字ミスがあったり賞味期限が近くなったりしただけで、品質には何ら問題のないお米やインスタント食品、せんべい、ゼリーなどを無償で提供しています。

「私たちの名前や活動が、この事業を通じて人から人へと伝わり、より包括的に対象者を支えられるようになった。多くの方から感謝の言葉をいただけてうれしいです」と話す代表理事の羽賀さん。

今後は、対象者とともに笑顔で過ごせるよう、今ある事業を継続しながら社会貢献していきたいとのことで、支え合いの輪がますます広がっていくことが期待されます。

【代表理事】羽賀 烈 【電話番号】557-5757

つながる ひろがる みんなのチカラ

～市民公益活動団体紹介～⑳



企業などから寄せられた多くの品（食材など）

今月の表紙

11年目を迎えた本市の田んぼアート。今年のテーマは「大いなる翼とナスカの地上絵」です。6月16日・17日に1,000人を超える参加者により、古代蓮の里東側の田んぼに田植えを実施。それから約1カ月が経過し、空を舞うコンドルと2種の地上絵が浮かび上がりました。8種類の稲は、暑さに負けまいと力強く成長し、日々その表情を変えています。

- 市報ぎょうだに掲載されているあなたの写真を差し上げます。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）まで。
- 市民の皆さんの市政に対するご意見をお待ちしています。
- 市報をダイジ版に録音したものを希望者宅にお届けします。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）までご連絡ください。

